

## 論 文

## シスモンディ研究序説

—シスモンディの生涯と彼の遺産(下)—

小 池 澍

- I. はじめに
- II. 18世紀末～19世紀前半のヨーロッパに生きたシスモンディ
- III. シスモンディ自身によっては公にされなかった彼の作品  
(以上, 本誌第42巻第6号)
- IV. シスモンディ自身が公にした主要な作品
  - (i) 歴史関係の作品
  - (ii) 経済関係の作品 (以上, 本誌第43巻第3号)
  - (iii) 文学関係の作品
  - (iv) 宗教関係の作品
  - (v) 法律関係の作品 (以上, 本号)
  - (vi) 政治関係の作品
  - (vii) 時論的な小品
  - (viii) 小括
- V. シスモンディが受けとって後世に伝えた文書類
- VI. 結び

これまでに見てきたように、シスモンディは浩瀚な歴史書を2点も公にした。その彼は、生前からすでに歴史家としてヨーロッパ中に名声を轟かせていた。と同時に、シスモンディは経済学者でもあった。彼の死後しばらくすると、彼はむしろ『経済学新原理』の著者として世界中の人々に知られるようになりさえした。恐らくはそうしたことに鑑みてであろう。現在のジュネーヴ郊外シェーヌ=ブジュリーの教会の向かって右手すぐ裏のところにみいだされる「1969年に再建された」「J. C. L. ドゥ・シスモンディ」の墓碑の下段の部分

には、「歴史家にして経済学者」という文字が刻み込まれている<sup>1)</sup>。だがしかし、シスモンディは一生「歴史家にして経済学者」に終始したというわけでは決してなかった。彼は、同時に文学者でもあり、宗教学者でもあり、また法律学者でもあり、政治学者でもあり、さらには時論家でもあったのである。

### (iii) 文学関係の作品

文学者としてのシスモンディの代表的な著作は、1813年に刊行された『南欧文学論』全4巻<sup>2)</sup>であった。この作品は、前にも触れたように、もとはといえばアカデミー・ドゥ・ジュネーヴでの講義のために作成されたものであった。

『トスカーナ農業概観』と『商業的富について』の著者シスモンディは、『中世イタリアの諸共和国の歴史』の最初の8巻を刊行し終えた1809年に同アカデミーの哲学の教授に任命され、1811年冬から翌12年にかけての学期にヨーロッ

- 1) シスモンディの墓碑名については、つぎの文献に詳しく紹介されている。吉田静一『異端の経済学者——シスモンディ』新評論、1974年、137～38ページ。ちなみに、シェーヌ＝ブジュリー（Chêne-Bougeries）の教会を背にして右側の静かな道路を100～200メートルほど直進すると、右手に、シスモンディが彼の晩年をそこで過ごしたといわれる家屋をみることができる。いまでもなお民家として使われているらしいその家屋に近づいてみると、外壁には見苦しくない程度の大きさの標示板が掲げられており、そこにはつぎのように書き記されている。すなわち、「CH. S. ドゥ・シスモンディ/高名なるジュネーヴ市民/歴史家にして経済学者/イタリアの諸共和国の歴史をここで執筆した/1773～1842年」と。
- 2) J. C. L. Simonde de Sismondi, *De la littérature du Midi de l'Europe*, Paris et Strasbourg: Treuttel et Würtz, 1813, 4 tomes. ただし、この著作の場合には全巻が同時に発行されたというわけではなかった。その第1巻にみられる「1813年5月3日」付の出版者の広告によれば、「本書の印刷が全部は終わらないうちに読者の一部分が戦場に向けてパリを発つことになりそうなので、我々としてはとりあえず最初の2巻だけでもこれを発売しておくべきであると考えた。あとの2つの巻は……遅くとも今度の6月1日には発売の運びとなるであろう」（*ibid.*, t. I, p. [v]），ということであった。ちなみにその広告は、同書の初版初刷本にしかみることができない。仮扉の裏面に印刷所名が刷り込まれた同年発行の初版異刷本においてさえも、それは認めることができないのである。

パ南部の文学にかんする講義を担当することになった。彼は、確かに少年の頃から外国語の習得には意欲を燃やし、文学にも強い関心を示していた。『商業的富について』を世に問うてからは、女流文学者スタール夫人の主催するコッペのサロンに常連として参加してもいた。けれども文学にかんしてみずから講義をするのは、彼にとっては初めての経験であった。そのために彼は、たとえばイタリアのマントヴァ大学の文学教授の席にあったスペイン人アンドゥレス (Andres)、ドイツのゲッティンゲン大学文学教授ブーターヴェク (Bouterwek) やロマン主義者 シュレーゲル (August Wilhelm von Schlegel)、それにフランスのイタリア文学史家ジャンガネ (P.-L. Ginguené) らの諸業績に依拠<sup>3)</sup>しながら膨大な量の原稿を作成して講義に臨むことにした。そしてその原稿に若干手を加えて出版したものが、当面の著作『南欧文学論』であったのである。

それはさしあたり、「南欧」に題材を求めた比較文学の概説書であるといつてよいであろう。このように性格づけることについては、恐らくシスモンディ自身も一応は諒としてくれるに違いない。というのも彼は、同書の「はしがき」の中で、つぎのように述べているからである。すなわち、「私は……ただ、洗練された人々のために、外国の文学にかんして知っておくべき事柄をとりまとめ、それを提示しようとしただけなのである。私は、途方もなく広い分野において、新たな発見をしようと企てたわけでは決してない<sup>4)</sup>、と。その「はしがき」に続く本文においては、彼は、ラテン語からのロマンス諸語の派生（第1章）、アラビア文学（第2章）、プロヴァンス地方の言語と詩（第3～6章）、ワロン語ないしはオイル語による文学（第7～8章）、イタリア文学（第9～22章）、スペイン文学（第23～35章）、およびポルトガル文学（第36～40章）の歴史をとり扱い、それらの文学相互間の交流や影響関係などを概説している。「南欧」の文学を

3) Cf. *ibid.*, t. I, p. 12 n. et p. 13 n. より詳しくはつぎの文献を参照。Jean-R. de Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre d'un cosmopolite philosophe*, Paris, 1932, pp. 180-88.

4) *Sismondi, ibid.*, t. I, p. [i].

主題とするこの著作の本文の中でアラビア文学がとりあげられているのは、それが同地の古代の文学と中世の文学との懸橋としての役割を演じたとの認識からであった。必ずしもシスモンディに固有のものとはいえないそのような認識<sup>5)</sup>をも盛り込んだ同書は、彼自身によっておおよそつぎのように締めくくられている。すなわち、「我々は多くの点において、イタリア語やプロヴァンス語やスペイン語やポルトガル語から、つまりはただ1つの言語のさまざまな方言から、一個同一の精神のもろもろの変容態をみてとることができた」。「南欧」では「愛と騎士道と宗教」が渾然一体となっていたのであって、それが「ロマン主義的な精神風土を形成し」、当該地方の「詩に独特の性格を付与していたのである」。その詩は内容においてばかりでなく、さらに表現方法においても「ロマン主義」的であった。これは、「音楽や絵画」からの影響のせいである。ただし、「ロマンス諸語の中でもっとも名高い」フランス語だけは完全に趣を異にしている。この言語は、ギリシャ人やラテン人の詩を手本にしており、文学を法則に従わせる傾向を有している。「構想の完璧さ」と「思考の緻密さ」と「全体と個々の部分とのバランスのよさ」を身上とするフランス文学は、「古典主義」の理念を具体化したものであるといっても過言ではない。色彩豊かで大胆な比喩を用いる上述の詩と、「感覚に訴えることがまるでない」抽象的かつ論理的なフランス語の散文との間には、容易に相容れないものがあるのである<sup>6)</sup>、と。

5) アラビア文学と「南欧」の文学との関係についてのシスモンディの見解は、アンドウレスから借りたものであったらしい。イタリアのシスモンディ研究者ペツレグリーニは、つぎの文献において、「彼のその著作『南欧文学論』の中のアラビア文学に言及した部分にかんしては、シスモンディは、ただたんにスペイン人のイエズス会士〔アンドウレス〕を参考にしただけではないのであって、彼からさんざん学びとった挙句の果てに幾つかのくだりを全面的に模倣しさえしたのである」(〔 〕内は引用者——以下同様)と述べたうえで、その「模倣」の具体例を提示してもいる。Carlo Pellegrini, *Il Sismondi e la storia delle letterature dell'Europa meridionale*, Genève, 1926, pp. 55-6 e p. 56 n. 1.

6) Sismondi, *ibid.*, t. IV, pp. 557-61.

しかしながら、いま要約して紹介したシスモンディの「結論」からもうかがえるように、彼による「南欧」比較文学の概説は、スコットランド出身の政治家にして哲学者マキントッシュ（James Mackintosh）がいうところの「文学史の哲学」によって基礎づけられていた<sup>7)</sup>。『南欧文学論』の中のとりわけ「はしがき」にみられたつぎの一文を思いだすなら、この書の著者の真の意図は比較文学を概説することよりもむしろ、スタール夫人によって確立されたばかりの「文学史の哲学」を社会科学の方向に純化徹底ないしは展開させることのほうにあったのではなからうかと考えられさえする。その一文とは、すなわち、「私は全編をつうじてなによりも、諸民族の政治や宗教の歴史が彼らの文学に及ぼした影響と、逆に彼らの文学が彼らの性格に及ぼした影響との双方を明らかにし、正義や誠実の規範と美の規範との関係を、否むしろ徳性や人倫と感受性や想像力との関連を浮き彫りにしたいと考えた」<sup>8)</sup>、というものである。

したがって当の著作は、たんなる比較文学の概説書ではなくして、同時に「文学史の哲学」の研究書でもあったのだというべきなのかもしれない。いずれにせよそれは、1811～12年にアカデミー・ドゥ・ジュネーヴで「南欧」文学にかんする講義を行った哲学教授の作であったのである。さらに大雑把にいおうとすれば、「歴史家にして経済学者」ないしは社会科学者の筆になる文学関係の書であったということもできるであろう。

1813年刊のその『南欧文学論』は、当時のヨーロッパの各地に広範な読者をみだした。とくに出版地パリを中心とするフランスにおいては、同書は古典主義者とロマン主義者の双方によって精読され、折しも彼らの間に巻き起こりつつあった論争の中でたびたびひきあいになされることになったようである。この書の解説にみずからのシスモンディ伝の一章を割り当てたサリスによれば、文芸批評史上における『南欧文学論』の著者の立場はシュレーゲルのそれ

7) Cf. [James Mackintosh,] *De L'Allemagne, par Mad. de Staël, The Edinburgh Review*, vol. XXII, no. XLIII, October 1813, pp. 217-18.

8) Sismondi, *ibid.*, t. I, p. ii.

とは違って18世紀の合理主義と19世紀のロマン主義とのちょうど境目のところにあった。にもかかわらず当時のフランスの批評家たちは、一様にシスモンディの名をシュレーゲルらのロマン主義者の名前と結びつけた。そのうえで、古典主義の立場に立つ批評家たちは、新興のロマン主義のために派手な宣伝を繰り広げたといつてシスモンディを非難した。彼らの中には、たとえばシスモンディに依拠してシュレーゲルを攻撃するなど、敵の陣営に混乱をもたらそうとする作戦をとるものもあった。これにたいしてロマン主義の陣営のほうでは、確かにシスモンディは古典主義に執着しすぎるといった不満を漏らす向きもなくはなかったが、しかしロマン主義の立場に立つ大多数の批評家は、彼を自分たちの運動の指導者の1人として迎え入れた、ということである<sup>9)</sup>。そのようなこともあって、シスモンディの『南欧文学論』は、早くも1819年にその「第2版」の、また1829年には「第3版」の刊行をみることになった<sup>10)</sup>。

ロマン主義がナショナリズムや自由主義と不可分のものともみなされていたイタリアにおいては、つとに『商業的富について』やとりわけ『中世イタリアの諸共和国の歴史』の著者として令名が高かったシスモンディの新著『南欧文学論』は、リソルジメント運動を支える著述家たちから熱狂をもって迎えられた。他方の反動主義者・教権主義者・古典主義者の側では、1819年と翌20年に同書のイタリア語抄訳版が刊行された<sup>11)</sup>のを機縁に、シスモンディにたいする

9) Salis, *op. cit.*, chapitre IX, surtout pp. 183-85, 187, et 194-97.

10) J. C. L. Simonde de Sismondi, *De la littérature du Midi de l'Europe*, seconde édition, revue et corrigée, Paris, Strasbourg et Londres: Treuttel et Würtz, 1819, 4 tomes; troisième édition, revue et corrigée, Paris, Strasbourg et Londres: Treuttel et Würtz, 1829, 4 tomes. ちなみにこの著作の「第3版」をもとにした下記の諸版は、どちらもフランスの外において刊行されたものである。*Ibid.*, Bruxelles: Il. Dumont, et Londres: Dulau et C<sup>e</sup>., 1837, 2 tomes; Aix-la-Chapelle et Cologne: L. Kohlen, 1837, 2 tomes.

11) Sismondi, *Vera definizione del romanticismo*, tradotta da D. M. Dalla, Milano: Cavalletti, 1819, citata dal Pellegrini, *op. cit.*, pp. 138-39; J. G. L. Simonde de Sismondi [*sic*], *Della letteratura italiana dal secolo XIV fino al principio del secolo XIX*, [tradotta da Giovanni Gherardini,] Milano: Giovanni Silvestri, 1820, 2 volumi. これら2点の抄訳版のうち、前者については筆者未見である。

非難のヴォルティジを一段と強めるようになった<sup>12)</sup>。そうすることで彼らは、実はイタリアにおけるリソルジメント運動そのものの激化・拡大を未然に防止しようとしたのであろう。だがしかし、彼らの思惑に反してその運動は急激な盛り上がりと広がりを見せ、シスモンディの当面の著作にたいする人々の関心もいよいよ強まっていった。こうして1820年刊の抄訳版が、中部イタリア革命の前の年、つまりは1830年にまったく新たな装いのもとに再版されることとなったのであろう<sup>13)</sup>。

シスモンディのことをロマン主義者とみる今なお根強い見方は、以上のように19世紀の10～20年代のイタリアとフランスにおける激しい論争の中ではじめて形づくられたのであるが、そうしたシスモンディ観の形成とどれほどの関係があったのかは別として、彼の『南欧文学論』は当時のスペインやポルトガルの文学上の運動にたいしてもまた、一定の影響を及ぼしたようなのである<sup>14)</sup>。とくにスペインにおいては、著者の死の直前になってからであるとはいえ同書の抄訳版が刊行されさえた<sup>15)</sup>。

一方、シスモンディがいうところの「北欧」に位置するイギリスとドイツにおいては、彼の『南欧文学論』は、イタリアやフランスにおいてみられたほどの影響力は発揮することができなかった。この著作は、「それら2つの国々のロマン主義運動にはなんらの新しい要素をももたらさなかった」<sup>16)</sup> ようなので

12) Cf. Pellegrini, *ibid.*, pp. 124-46.

13) Giovanni Carlo Leonardo Simonde de Sismondi, *Storia della letteratura italiana dal secolo XIV fino al principio del secolo XIX*, Genova: A. Pendola, 1830, 6 volumi. なお、この版の発行地名を、サリスは迂闊にも‘Genève’と読み違えてしまったようである。Cf. Salis, *op. cit.*, p. 198 n. 2; *idem*, *Sismondi, 1773-1842, lettres et documents inédits, suivis d'une liste des sources et d'une bibliographie*, Paris, 1932, p. 67.

14) Cf. Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, pp. 201-2.

15) Sismonde de Sismondi [*sic*], *Historia de la literatura española desde mediados del siglo XII hasta nuestros días*, traducida y completada por José Lorenzo Figueroa, Sevilla: Alvarez y Compañía, 1841-42, 2 tomos.

16) Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, p. 200.

ある。しかしながら、なんらの反響をも呼ばなかったというわけではもちろんない。それどころかイギリスでは、前述のマキントッシュが同書の発刊に素早い反応を示したし<sup>17)</sup>、彼に続いて2人の著述家が、権威ある雑誌に詳細な書評を載せもした<sup>18)</sup>。さらに、該書がマキントッシュによってひきあいにだされた年から数えてちょうど10年目の1823年には、英語による翻訳版が姿をみせもした<sup>19)</sup>。アメリカのほうでも別版本がだされたその翻訳版は、のちに4度も版を重ねる結果となりさえした<sup>20)</sup>。またドイツにおいても、原典初版の刊行と同時にその書評を例のプーターヴェク自身が引き受けたらしいし<sup>21)</sup>、彼による書

17) Cf. [Mackintosh,] *op. cit.*, p. 218.

18) Cf. (Anonym,) Ginguené and Sismondi's *Literary History of Italy, &c., The Quarterly Review*, vol. XI, no. XXI, April 1814, pp. [1]-32; [Hazlitt,] Sismondi's *Literature of the South, The Edinburgh Review*, vol. XXV, no. XLIX, June 1815, pp. 31-63.

19) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Historical View of the Literature of the South of Europe*, translated, with notes, by Thomas Roscoe, London: Henry Colburn and Co., 1823, 4 vols.

20) *Ibid.*, New-York [sic]: J. & J. Harper, 1827, 2 vols. *Ibid.*, second edition, including all the notes from the last Paris edition, translated, with notes and a life of the author, by Thomas Roscoe, London: Henry G. Bohn, 1846, 2 vols.; from the last London edition, New York: Harper & Brothers, 1848, 2 vols.; reprint of 1848 ed., [Philadelphia:] R. West, 1973, 2 vols., mentioned in *Books in Print, 1987-88*, New York and London, [1987,] vol. 3, p. 4974. *Ibid.*, third edition, London: Henry G. Bohn, 1850, 2 vols. *Ibid.*, fourth edition, London: Henry G. Bohn, 1853, 2 vols.; London: George Bell & Sons, vol. I: 1880, 1889, 1895, 1908, vol. II: 1883, 1889, 1890. *Ibid.*, fifth edition, London: George Bell and Sons, vol. II: 1898, 1903. なお、本注の末尾に掲げる文献によれば、この英訳版の第4版には1872~77年発行の、また本注冒頭に掲げたニュー・ヨーク版には1818年発行の、異副本もあるということであるが、それら2点のうち1818年に発行されたといわれるものについては、にわかにはその存在を信ずるわけにはゆかない。Cf. *The National Union Catalog, Pre-1956 Imprints*, vol. 547, [London and Chicago,] 1978, p. 116.

21) Cf. lettre de Sismondi à M<sup>me</sup> d'Albany, Pescia, 20 janvier 1814, dans les *Lettres inédites de J. C. L. de Sismondi, de M. de Bonstetten, de Madame de Staël et de Madame de Souza à Madame la Comtesse d'Albany*, publiées par Saint-René Taillandier, Paris, 1863, p. 223.

評のせいかどうかはともかくとして遅くとも1816～18年までにはドイツ語による翻訳版が現われもした<sup>22)</sup>。こうして『南欧文学論』は、ドイツとイギリスの人々にたいしても多かれ少なかれ影響力を発揮したのである。

ちなみにシスモンディの当初の計画では、この『南欧文学論』は、「北欧文学論」によって補完されるはずであった。再び同書の「はしがき」に立ち戻るなら、そこにはつぎのような一節がみいだされる。すなわち、「私がはじめに抱いていた計画……はヨーロッパの全体に及ぶものであったのであって、私はその地方のうちの南部の諸民族について語ったにすぎない。……けれども私はなんとかして、ロマンス語による文学とチュートン人の文学とが相互の間に有していた諸関係を指摘し、そうすることで両者の相互影響を垣間見させようとした。それらの関係は、私の仕事の後半の部分を成し遂げて北欧の文学についても論ずることができるようになるならば、そこにおいてはさらにいっそう明らかにされるはずである。その際には私は、文明化されたヨーロッパを分かちあう二大人種のうちの一方が他方から何を学んだのかをはっきりとさせることに力を尽くすつもりである。そうして、文芸の復興の頃からの人間精神のもっとも輝かしい諸機能の歴史を素描しようと思うものである」<sup>23)</sup>、と。また、同じ『南欧文学論』の本文の最終ページには、「いつの日にか北欧の文学にかんする同様の著作を仕上げることができるなら、そのときには私は、もっと飾り気の

22) Sismondi, *Über die Literatur des südlichen Europas*, bearbeitet von L. Hain, 1<sup>r</sup> Bd., Leipzig: Brockhaus, 1814, erwähnt in *Gesamtverzeichnis des deutschsprachigen Schrifttums (GV) 1700-1910*, bearbeitet unter der Leitung von Hilmar Schmuck und Willi Gorzny, München, New York, London und Paris, 1985, Bd. 135, S. 166. ただし、1814年に刊行されたといわれるその版については筆者未見である。筆者が参照しえた『南欧文学論』ドイツ語翻訳版は、つぎの2巻本のみである。J. C. L. Simonde Sismondi [sic], *Die Literatur des südlichen Europa's* [sic], herausgegeben und mit Anmerkungen begleitet von Ludwig Hain, Leipzig und Altenburg: F. A. Brockhaus, erster Band: 1816, zweiten Bandes erster Abtheilung [sic]: 1817, zweiten Bandes zweite Abtheilung: 1818; zweiter Band, Leipzig: F. A. Brockhaus, 1819.

23) Sismondi, *De la littérature du Midi...*, [première édition,] t. I, pp. ii-iii.

ない、我々とはさらにかけ離れたタイプの、それだけにまたいっそう長くつらい仕事をつうじてはじめて理解しうようになる美女たち〔北欧のミュージタチ〕を紹介することになるであろう<sup>24)</sup>、といった一文も認められる。だがしかし、その「美女たち」はシスモンディによってはついに「紹介」されることにならなかった。いうまでもなく「北欧の文学にかんする」彼の「著作」が日の目を見なかったからである。

それでは、『南欧文学論』を補完するはずのその「北欧文学論」のための「仕事」はなぜ「成し遂げ」られなかったのであろうか。この疑問にたいして、サリスはつぎのように答えてくれる。すなわち、シスモンディには「言語と文学の知識が不十分であった〔のであって〕、彼は、英語とドイツ語はできたけれどもオランダ語とスカンジナビア諸語とロシア語とポーランド語についてはちんぷんかんぷんであった<sup>25)</sup>からである、と。しかしながら、少なくともシスモンディの言語能力には目を見張るものがあった。彼は、英語とドイツ語が「できた」だけではなかった。サリス自身も認めているように、シスモンディは、4歳の時点においてすでに「ロマンス諸語のすべて」を習得しており、「プロヴァンス語とイタリア語とスペイン語とポルトガル語の作品を解説すること」も可能であった<sup>25)</sup>。とくにスペイン語とイタリア語については、それぞれの言語を「ものにするためには2〜3カ月も専念すれば十分である<sup>24)</sup>と断言してさえいた。これらのことから、サリスによって「ちんぷんかんぷんであった」といわれた諸言語にしても、それらをシスモンディが本気で学ぼうとしていたならば必ずや「ものにする」ことができたに違いないと推考される。そしてそこからさらに、「北欧」の諸言語を駆使して作品を味読することができたならば同地の文学について論ずるのに十分な「知識」を得ることも可能になったはずであるといった具合に考えを推し進めるのは、決して困難なことではない。

24) *Ibid.*, t. IV, p. 562.

25) Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, p. 178.

にもかかわらず彼は、「北欧文学論」のための「仕事」を成し遂げることがなかった。とすればそれは、より根本的には、「北欧」全体の「文学」ではなしにとりわけイギリスの経済の、そしてまた祖国ジュネーヴや「第二の祖国」イタリア<sup>26)</sup>や暫時的な祖国フランス<sup>27)</sup>の社会の、歴史と現状を究めることのほうが彼にとっては先決問題であったからであろう。

こうして「北欧の文学にかんする著作」は計画倒れに終わったのであるが、しかし、シスモンディが実際に公にした文学関係の著書は、『南欧文学論』だけではなかった。そのほかにもう1点、「北欧」の作家「ウォルター・スコット (Walter Scott) の歴史小説から着想を得て〔フランスの〕メロヴィング王朝時代の風俗・生態を描いた」といわれる小説『ジューリャ・セヴェラ』全3巻があった<sup>28)</sup>。1822年に発表されたこの作品の執筆時期を特定するためには、ペッサのヴァルクウーザの屋敷に埋もれていたシスモンディの文書類をはじめて世に紹介したヴィッラーリ (Pascal Villari) によるつぎのような逸話が参考になる。すなわち、「ペッサにおいては……彼〔シスモンディ〕は、晩になると家族に囲まれて、またそこに使用人の若干のものをも交じえながら、大きな声でなにかを朗読するのが常であった。……小説『ジューリャ・セヴェラ』が書かれたのも、まさにそこでの団らんのためであったのである」<sup>29)</sup>、と。当該小説はシスモンディとその家族がともにペッサの地に暮らしていた間に執筆さ

26) とりわけトスカーナを、シスモンディは「第二の祖国」と呼んでいたらしい。Cf. Sais, *ibid.*, p. 441.

27) この点については、本稿(上)の注6を参照されたい。

28) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Julia Sévéra, ou l'an quatre cent quatre-vingt-douze*, Paris, Strasbourg et Londres: Treuttel et Würtz, 1822, 3 tomes. この小説についての本文中に引用した至極短い解題は、サリスによるものである (Sais, *ibid.*, p. 398)。『南欧文学論』の解説にはみずからのシスモンディ伝のまるまる1章を費した彼であったが、『ジューリャ・セヴェラ』にかんしてはほんの幾つかのページにおいて事の序でに言及するのみにとどまっている。

29) Pascal Villari, Une conversation de Napoléon I<sup>er</sup> et de Sismondi, *Revue historique*, 1<sup>er</sup> année, tome 1, janvier-mars 1876, pp. 238-39.

れたのだといわんばかりのこのヴィッラーリの話に、シスモンディ自身の同書の「はしがき」にみられるつぎの一文、すなわち、「このたび読者に提供する小説は……私が『フランス人の歴史』の最初の数巻を執筆するために行っていた研究や作業から生みだされたものなのである」<sup>30)</sup>という一文を重ねあわせてみよう。そうすると、この歴史小説が書かれたのはシスモンディがペッシャでの家族団らんの雰囲気の中で『フランス人の歴史』の最初の数巻の準備を進めていた頃のことであったという推定が成り立つ。そこでさらに、1821年に刊行が開始された前掲のシスモンディ自身のフランス史書とサリスの筆になる彼の伝記とをのぞいてみるなら、問題の小説が、あるいは少なくともその一部分が執筆されたのは1819年6月から1820年秋までの間のことであったに相違ないと思われる。それらの文献によれば、当時のシスモンディは、『フランス人の歴史』のための仕事を抱えながら新妻ジュシーとともにペッシャに母親を訪ねていたのである<sup>31)</sup>。

しかるにそのペッシャが位置するトスカーナにおいては、『ジューリャ・セヴラ』はそれの刊行と同時に当局の検閲を受け、2つの個所から3つの行が抹消されるはめに陥った。その4年余り前にはローマのほうで『中世イタリアの諸共和国の歴史』の何巻かが禁書扱いにされていた<sup>32)</sup>けれども、トスカーナにおいてシスモンディの著作が検閲にひっかかったのはこれが初めてのことであった。それほどまでに当面の歴史小説は危険視されたのである。その理由は、「現在の政治情勢を余りにもまざまざと思い起こさせる」というものであったらしい<sup>33)</sup>。また、同書についてはほぼ同じ頃にフランス語圏のほうでも若干違った観点からの書評が現われていた。そこには、「ウォルター・スコットを模

30) Sismondi, *ibid.*, t. I, p. IV.

31) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Histoire des Français*, t. XXIX, Paris: Treuttel et Würtz, 1842, p. 516; Salis, *ibid.*, pp. 382 et 431.

32) この点については、本稿(中)の注12の後半部分を参照されたい。

33) Cf. A. de Rubertis, *La censura delle opere del Sismondi in Toscana, negli Studi su G. C. L. Sismondi, raccolti per il primo centenario della sua morte (1942)*, Roma e Bellinzona, [1945,] pp. [385]-386.

倣したこの歴史小説の場合には史実が小説家の才能にたいして優位を占めている」といった内容のことが述べられていたようである<sup>34)</sup>。

だがしかし、いま引用した2つの『ジューリャ・セヴラ』評はそのどちらもが、ほかでもなく批評の対象それ自体に依拠したものではなかろうかと思われる。なぜなら、該書の「はしがき」にはつぎのような断り書きがみられるからである。すなわち、「スコットランドのすばらしい小説の作者の例に倣って〔本書の〕各章の冒頭に付した引用文は……いずれも現代の著述家たちから借りたものばかりである。それらを掲げたのは、私が想像力を働かせて描きだした場面がいかにか今世紀の現実と似通っているかということを示すためなのである。ところで、この小説の主人公フェリクスとジューリャとセヴェリウスは純粋に架空の人物であり……ヴォリュズィアニュスの戦いとトゥデリクの遠征もまた作り話である。……それ以外の公的な出来事はおおむね史実に基づくものである。私が年代記を踏みはずしたのは聖ゼノクにかんしてだけであるように思う」<sup>35)</sup>、と。

そうだとすれば、トスカーナでの一件とフランス語圏での例の書評記事の出現はそれ自体『ジューリャ・セヴラ』の直接的な影響のもとに生じたことであったのであり、その影響力の強さと大きさを如実に物語る出来事であったのである、ということになるであろう。実際この歴史小説は、上掲の『南欧文学論』ほどではないにしても、ヨーロッパの各地に反響を呼んだ。それは、刊行と同時にドイツ語と英語に翻訳された<sup>36)</sup>。英語翻訳版のほうは早くもその2年後の1824年に再版となった<sup>37)</sup>。そうして1840年と1842年には、それぞれ、イタ

34) Cf. Salis, *ibid.*, p. 439.

35) Sismondi, *Julia Sévéra...*, t. I, pp. VI-VIII.

36) Simonde de Sismondi, *Julia Severa, oder das Jahr Vierhundert und zwei und neunzig*, [übersetzt] von K. L. Methusalem Müller, Leipzig: C. H. F. Hartmann, 1822, 2 Theile [sic]. 英語翻訳版については次注を参照されたい。

37) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Julia Severa, or the Year Four Hundred and Ninety-two*, London: G. and W. B. Whittaker, and Munday and Slatter, 1822, 2 vols.; 1824, 2 vols.

リア語による翻訳版<sup>38)</sup>とフランス語による原書の実事上の改訂版<sup>39)</sup>が現われたのである。

#### (iv) 宗教関係の作品

これまでにみてきた文学や経済やとりわけ歴史にかんするシスモンディの労作においては、彼の宗教学者としての側面がしばしば自己を顕示していたようである。たとえば『中世イタリアの諸共和国の歴史』全16巻には、カトリック教の倫理についての彼の批判的分析があちこちに散見された<sup>40)</sup>。だからこそその著作は部分的にもせよまさにローマにおいて禁書扱いにされたのであろうし、また、同書を読んだイタリアの著名な文学者マンゾーニ (Alessandro Francesco Tommaso Antonio Manzoni) は、カトリック教の倫理を断固として擁護する作品を手がけるようになったのもあろう<sup>41)</sup>。しかしながらシスモンディのほう

38) G. C. L. Simondo de'Sismondi, *Giulia Severa, ossia l'anno CDLXXXII nelle Gallie*, Capolago: Elvetica, 1840, 1 volume.

39) J.-C.-L. Simonde de Sismondi, *Julia Sévéra...*, Bruxelles: N.-J. Gregoir, V. Wouters et C<sup>e</sup>, 1842, 1 tome.

40) J. C. L. Simonde (de) Sismondi, *Histoire des républiques italiennes du moyen âge*, Zürich: Henri Gessner, puis Paris: H. Nicolle, et puis Paris: Treuttel et Würtz, 1807-18, surtout t. XVI, chap. CXXVII.

41) Cf. Alessandro Manzoni, *Sulla morale cattolica, osservazioni*, Milano, 1819, parte prima, p. I; Roma, 1826, p. 3; Prato, 1834, p. 3; *idem*, *Osservazioni sulla morale cattolica, parte I e II (postuma) e pensieri religiosi*, studi introduttivi, commenti e appendice di Antonio Cojazzi, terza edizione riveduta, Torino, [1945,] p. 78; *idem*, *Osservazioni sulla morale cattolica*, a cura di Romano Amerio, Milano e Napoli, 1965, vol. I, p. IX; *ibid.*, a cura di Umberto Colombo, [Milano, 1965,] p. [205.] なお、この著作のフランス語による翻訳版と英語によるそれとは、つぎに掲げるような実に象徴的なタイトルが付けられている。[*Idem*,] *Observations de M. Manzoni à M. Sismondi, sur la morale catholique*, [Anneci,] 1835; Alexander Manzoni, *A Vindication of Catholic Morality, or a Refutation of the Charges Brought Against It by Sismondi, in His "History of the Italian Republics During the Middle Ages,"* London, 1836.

は、それらにたいして真向から反論するために一書を設けるというようなことはしなかった。宗教学者としての彼は、ただ、18～19世紀におけるプロテスタント教会とカトリック教会の宗教的信念の変遷の過程を検討してそれらの教会の間の境界線はあまり重要な意味をもたなくなりつつあると推断する連続論文「宗教的信念の進歩を顧みて」<sup>42)</sup>など、2～3の小品をものしたにすぎなかった。ちなみに、いまひきあいにだした連続論文は、やがてひとまとめにされてパンフレットの形式において再版された<sup>42)</sup>ばかりでなく、同様にパンフレットの形式において英語に翻訳されもした<sup>43)</sup>。

したがって、彼の宗教観についての体系的な理解に達するのは必ずしも容易なことではない。そのためにはまた、たとえばつぎのようなエピソードにも耳を傾けなければならないであろう。すなわち、シスモンディとその夫人ジェスィーとは人も羨むほどに仲睦まじい夫婦であったのであるが、それでも2人の間には、夫人の祖国イギリスはどの点においても素晴らしい国として手放して賛美しうのかどうかということのほかにもう1つだけ折りあいのつかない問題があった。それは宗教にかんする問題であったのであって、夫人がイギリス国教会の「39カ条」を全面的に受け入れていたのにたいし、シスモンディのほうはその矛盾に目を瞑る気にはなれなかった。彼にしてみれば、形式の中に逃げ道をみいだしながらキリスト教への信仰には良識がしかるべき役割を演じているといった主張の持ち主を永遠に非難し続けようとする公認の教義は、信ずるに足りないものであった。そもそもシスモンディの信仰心は、彼自身の魂のほとばしりであったのである。彼は、みずからの内において神を崇めるのみにはとどまらずに外へでて兄弟たちの群れに投じてもそうしたいと強く感じて

42) J.-Ch.-L. Simonde de Sismondi, *Revue des progrès des opinions religieuses, Revue encyclopédique*, cahiers de janvier, février et mars 1826, et tirage à part, [Paris: Rignoux, s. d.,] 51p.

43) J. C. L. de Sismondi, *Review of the Progress [of Religious Opinions, During the Nineteenth Century*, translated by T. B. R., London: Treuttel and Würtz, 1826, 79p.

いた。だからこそ彼は、日曜日になるときまって教会へでかけていったのである。と同時に、説教師が理性を踏みじったりありえないことを口にしたときにはかえって疎外感を覚えもしたのである<sup>44)</sup>、と。ここからは、カトリックの教義にたいしてはもとよりプロテスタントのそれにたいしても無批判的な態度をとることのできない正真正銘の「迷える子羊」としてのシスモンディの姿が浮かびあがってくるであろう。

#### (v) 法律関係の作品

宗教学者としてのシスモンディと同様に法律学者としての彼もまた、数点の小品を遺しただけであった。それらの小品の中でもっともよく読まれたものは、1815年のフランスの「帝国憲法追加法令」にかんする連続論文であったようである。サリスによれば、同年の3月20日に帝位に復したナポレオンは、新しい憲法の起草をシスモンディのコッペ時代の先輩の1人バンジャマン・コンスタン (Benjamin Constant) に依頼した。それより数年前にコッペ・グループにたいするナポレオンの監視が強化された際にはゲッティンゲンに逃れて隠退することにしたコンスタンであったが、そうした過去のことはすっかり水に流してしまったのか、彼は二つ返事でナポレオンの依頼を受諾し、さっそく憲法草案の作成にとりかかった。コンスタンがまとめた草案は若干の修正を経たのちにナポレオンによって承認された。それが、ナポレオンの復位に伴って再び官報として発行されるようになった新聞『世界報知 (le *Moniteur universel*)』の4月23日号に「帝国憲法追加法令」というタイトルのもとに公にされたのである。年初来パリに滞在していたシスモンディは、早くも4月4日の時点においてコンスタン本人の口から憲法起草の話を聞いていたという事情もあって、「追加法令」の公布には素早い反応を示すことができた。彼は、同じ官報の4月29日号、5月の2日号、6日号、8日号にその憲法典を吟味、というよりも

44) Avant-propos à J. C. L. de Sismondi, *Fragments de son journal et correspondance*, [publiés par A. Montgolfier,] Genève et Paris: Joel Cherbuliez, 1857, pp. VII-VIII.

むしろ実質的には「擁護」する内容の論文を發表したのである。それだけにこの連続論文は、多くの人の目にとまると同時にうさん臭い目で読まれることも少なくなかった。そのせいかどうかはともかくとして、シスモンディは、官報に掲載されたばかりのみずからの論文に手を加え、さらに書き下ろしの原稿をも追加して、同じ1815年の5月末頃に『フランスの憲法典の吟味』と題するパンフレットを發行した、ということである<sup>45)</sup>。

全体で124ページに及ぶそのパンフレットを實際にのぞいてみるなら、最初の74ページは「序文」と3つの章から成っており、そこには法律学者としてのシスモンディの力量が遺憾なく發揮されている。彼は、まずはじめに「序文」において、憲法典の吟味の原則らしきものをつぎのように提示する。すなわち、「憲法典の吟味にあたっては、まず市民の権利、もしくは個人の自由の保障を、ついで人民の権利、もしくは国民の意思の力の保障を、そして最後に国家統治権相互の間の均衡、もしくは政府の力強さや慎重さと人民の安寧との保障を、つぎつぎと探りだしてゆかねばならない」<sup>46)</sup>、と。こう述べたうえで彼は、例の「帝国憲法追加法令」の吟味を開始する。「第1章」、「第2章」、「第3章」においてはそれぞれ「人身の安全の保障」、「国民の代表」、「統治権相互間の均衡や調和」にかかわる条文を引用し、それらに、同じフランスの以前の、あるいはまた同じヨーロッパのほかの国々の、憲法の条文をつきあわせたりもしながら検討を加えてゆく。そうして彼は、「当面のフランスの憲法は……このうえなくしっかりと保障を惜しみなく諸個人の自由に与え……どの国民が享有するものよりもいっそう威厳のある国民の代表を創設し……統治権相互間のバランスを十分にとってあらゆる対立を緩和するとともにあらゆる抗争を速やかに終結させるようにもした」<sup>47)</sup>と結論するのである。

パンフレット『フランスの憲法典の吟味』のこれまでの個所においてもとき

45) Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, pp. 168-71 et 257-92.

46) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Examen de la Constitution française [sic]*, Paris: Treuttel et Würtz, 1815, p. 8.

47) *Ibid.*, p. 73.

どき顔をのぞかせていた政治学者ないしは時論家としてのシスモンディが、つぎの38ページにわたる3つの章においては一段と前面に現われでてくる。彼は、いわば法律学者としてのシスモンディを擁護するために、「第4章」では「追加法令」を制定することになったナポレオンの復位の正当性を、また「第5章」においては国民議会ではなしに皇帝ナポレオンによる「追加法令」の制定という手続きがとられざるをえなかった理由を、さらに「第6章」ではフランスの自由な人民にとってのナポレオンの「才能と根性」の必要性を、同国の、あるいは広くヨーロッパの政治・軍事情勢との関連において明らかにしようとする。そして最後の12ページを占める「第7章」においては、いわば法律学者としてのシスモンディと政治学者ないしは時論家としての彼とが合して1つになって、主権を有するフランス国民は皇帝をはじめとするみずからの代表のいずれにも無制限の権限を委ねるものではないということを確認しながら、フランスの憲法典の吟味をしめくくるのである。

このように概観すると、当該パンフレットはそれのもとになった上掲の連続論文と同様に「追加法令」を「擁護」<sup>48)</sup>したものにほかならないとか、あるいは「『追加法令』の公布は決定的にシスモンディをナポレオンの味方に引き入れさせることになった」<sup>49)</sup>というサリスの見解には、ほとんど非の打ちどころがないかのようにみえる。だがしかし、同じパンフレットの細部にまで目を配ってみるなら、必ずしもそうはいえないかもしれないと思われる。なぜならそこには、権力の座に返り咲いたナポレオンを牽制しているのではなかろうかと思わせるような文章<sup>50)</sup>や、「この憲法〔追加法令〕の……幾つかの部分は……まだまだ不完全であり不十分である」<sup>51)</sup>といった趣旨の文章が散見されるからである。たとえば、先に引用した結論のすぐあとのところにはつぎの

48) Salis, *ibid.*, p. 282.

49) *Ibid.*, p. 278.

50) Cf. Sismondi, *ibid.*, pp. 49-50, 97-101, 103-5, 113-14, *etc.*

51) *Ibid.*, p. 119.

ような一文もみいだされる。すなわち、「フランス人の願望や必要は何であるのか、時代の精神はいかなるものであるのか、他のすべての栄光を味わってみたあとでなおも自分に残されている新たな栄光とはどのようなものであるのか、そして最後に、対外的には〔フランス〕国民の名誉を重んじさせ、対内的にはすべての市民の権利をまもる毅然とした、しかも節度のある行軍とはどのようなものであるのか、これらのことを理解するためには十分な年齢に達した〔または、十分に偉大な〕人物〔ナポレオン〕によって執行されるという最高の特典をその憲法は享受することになるであろう」<sup>52)</sup>、と。これらの文章をもあわせ読むならば、当面のパンフレットは、「追加法令」を全面的に「擁護」したものであるとか、それを制定し、みずから執行することになるナポレオンへの絶対的な支持を表明したものであるというよりもむしろ、彼に牽制をかけながら同時に期待もかけざるをえないという複雑な心境をもって「追加法令」を文字どおり「吟味」したものであるといったほうがよいのではなからうかと思われてくるのである。

ところでシスモンディはなぜ、いま述べたような複雑な心境に陥ったのであろうか。けだしそれは、ナポレオンのエルバ島脱出の報道を機縁にウィーン会議がにわかに進展をみせ始めたのを知って、近い将来ヨーロッパに復古主義・正統主義を原理とする反動的な体制が樹立され、フランスや同国に隣接するジュネーヴ、イタリアなどの諸地域の自由が、とりわけスイスとフランスの場合には独立までもが、脅威にさらされることになるかもしれないと考えた<sup>53)</sup>からであろう。当時のシスモンディにしてみれば、そのような憂うべき事態はなんとしても回避しなければならなかった。そのためには、捲土重来して「帝国憲法追加法令」という「新しい憲法」<sup>54)</sup>を制定したばかりのナポレオンの「才能と根性」に期待をかけるほかなかった<sup>55)</sup>。ナポレオンはちょうどその1年前

52) *Ibid.*, pp. 73-4.

53) Cf. *ibid.*, pp. 3-4, 106-8, 111, 121-24, etc.

54) *Ibid.*, p. 7 et *passim*.

55) Cf. *ibid.*, pp. 103-10, etc.

に、対仏同盟を結ぶ諸列強の戦力に屈して帝位を退き、エルバ島への配流の身となったのであるが、当面のウィーン会議において決定的な発言力を有しているのはまさにあのときに彼を窮地に陥れた諸列強なのであった。しかるに、これらの列強によって辛酸をなめさせられたことのあるナポレオンはまた、対外的にはたとえばジュネーヴをフランスの一部とみなし続けたりしながら「領土拡張主義」的な「解放」戦争を展開すると同時に、対内的にもたとえばスタール夫人を中心とするコッペ・グループのメンバーらに追放その他の迫害を加えるなどして独裁的な政治を断行した経歴の持ち主でもあった。かつてのコッペ・グループの一員として、しかもまたかつてのフランスの一市民として、シスモンディはいかにナポレオンが老獺で野心的な政治家であるかということをよく知っていた。だから彼は、ナポレオンの「才能と根性」に期待をかけるにしても彼がかつての轍を踏まないように牽制しながらそうするのではなければならないと思ったのであろう。

そしてそのような気持を抱いて「フランスの憲法典の吟味」を行ったために、シスモンディは、以前の憲法とは違って分別盛りのナポレオンがみずから制定した「追加法令」には「諸個人の自由」にたいする「しっかりとした保障」と「威厳のある国民の代表を創設」する旨の確約と三権の相互の間の「バランス」にたいする配慮とが盛り込まれているのだということを、ことさらに強調する結果となったのであろう。いずれにせよ、彼は単純な気持で「追加法令」を「擁護」したのでもなければ素朴な気持で復位後のナポレオンに「味方」したのでもないように思われるのである。

（未完）

追記 本稿の（上）と（中）を発表してからこれまでの間に、何人かの先生方から励ましのお言葉を頂戴した。とりわけ本学名誉教授の杉原四郎先生からは、つぎのような大変ありがたいご指摘まで賜った。すなわち、本稿

（中）の62ページにおいて J. C. L. Simonde de Simondi, *Études sur l'économie politique*, Paris ; Bruxelles, 1837-38, t. I, premier essai の邦訳としてとり扱われている高島素之・安倍浩訳『経済恐慌論』、『経済學説體系』(9), 而立社, 1923年, 第3篇は, 実際には, Karl Diehl und Paul Mombert (hrsg.), *Ausgewählte Lesestücke zum Studium der politischen Ökonomie*, Bd. 7, Karlsruhe i. B., 1913, SS. 89-121 からの重訳なのではなかろうか, と。そこで改めて調査しなおしたところ, まさしくご指摘のとおりであった。杉原先生にはここにそのお名前を記して感謝申しあげる次第である。